感動の一点

『白い樹』

1991年　小川原　脩　画

小川原脩が晩年になって数点描いた「入口の白い樹」。二股に分かれた白い木の肌が、艶めかしさを持った不思議な作品だ。また、1978～79年には同じく樹と動物との組み合わせの「森の入り口の白い樹」シリーズも手がけており、森を人為の及ばない空間として畏れ敬うシンボルとして白い樹を描いている。

小さな作品だが、画面中央辺りの背景が一段と沈んだ色になっており、奥へと続く森を予感させる。二股のところに、シマリスが控えめに留まっているのが印象的だ。冬支度に追われるリスが、その忙しない動きを止め、葉をすべて落とした白樺に寄り添って休息している。着々と進む季節の中、時が止まったかのような晩秋のワンシーン。この「白い樹」は小さないのちを包み込み「抱っこ」するような姿と、穏やかな色合いが相まって、見ているうちにほっこりとした気分になる。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

415回

―野生のブドウ―

▲ヤマブドウの紅葉と熟した実（町内字末広）

秋が深まり、冬へと移り変わりつつある林の中でも、鮮やかに紅葉したヤマブドウの葉はひときわ目立つ。木や草に覆いかぶさり絡みつき、一帯を明るく染め上げる。赤や黄のほか、ところどころに差す茶色のまだらが彩りを一層豊かにしている。

ふと、葉と葉の隙間から大小不揃いな黒紫色の実が房になってついているのに気づき、一粒つまんで食べてみる。果肉は少ないが、たしかな甘みと後に引く強めの酸味。なんとも野趣を帯びたフルーティな風味だ。次は少し離れた株の実を一粒食べてみる。…!!す…酸っぱい！先ほどの実と違い、甘さをかき消してしまうくらい渋みと酸味が強い。ヤマブドウはどうやら味にもバラつきがあるようだ。

そんなヤマブドウだが、実は人との関わりの歴史はかなり長い。日本最古の歴史書とされる日本書紀の中では「蒲陶（エビカヅラ、もしくはエビ）」という名前で登場しているし、もっと遡って縄文時代の遺跡では種が付着した土器が見つかっている。縄文時代の人々はそのまま食べるだけでなく、発酵させてワインを作っていたとする見解もあるから驚きだ。現代ではその酸味の強さを生かしてジャムにしたりジュース、ワインにしたりと利用されている。加工品が多いこともあって、年中楽しめるのも魅力だ。

毎年11月の第3木曜日はワイン「ボジョレー・ヌーヴォー」が解禁になる日。ワインに舌鼓を打ちながら、私たちの身のまわりの野生のブドウにも目を向けてはいかがだろう。

※ヤマブドウでお酒を作ることは法律で禁止されていますのでご注意ください

文：小田桐　亮（倶知安風土館　学芸員）

ミュージアム通信

Shu Ogawara

小川原脩記念美術館　倶知安風土館
☎21-4141　☎22-6631

開館時間は9時～17時
（入館は16時30分まで）

11月の休館日
7日、14日、21日
11月27日～12月1日は展示替え休館

美術館から

東京で開催中の「シャガール展」を見る機会がありました。シャガールと言えば、恋人たちや花束、牛や馬、さらには魚でさえキャンバス上を自由に浮遊する幻想的な作品で知られています。ですが、今回は陶器や石の彫刻、レリーフなど、まさにキャンバスの世界を三次元化したような作品が中心。土をこねり、ノミをふるう姿まで想像でき、シャガールの新たな一面を見た思いがしました。

実はこの展覧会、企画会社の友人が仕掛けたもの。と言っても、本人は外国での打ち合わせから帰国した直後、急逝してしまったので、これが最後の企画、画家でしたら遺作ということになります。最後にいい仕事を見せてくれました、榛澤さん。

館長　柴　勤（つとむ）

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展　小川原脩ものがたり」

本展では、常に新たな芸術潮流を感じ取りながら、変容を続けた小川原脩の画業を、ひとつの物語を読み進めるように紹介します。

会期：開催中～11月26日（日）

「小川原脩展　アジアの街角で」

小川原脩は晩年のアジアへの旅で、中国桂林、チベット、インドのそれぞれの風物に、鮮烈な印象を受けました。小川原脩が描いたアジアの街角では、人と動物たちが繰り広げる悠々とした時間が流れます。

会期：12月2日（土）～平成30年4月15日（日）

■企画展示

「第59回麓彩会展」

1958年、小川原脩をはじめとする8人の発起人により創設された「麓彩会」。59回目の本展では、地域にゆかりが深く、かつ道内画壇を代表する作家13人の作品を小川原脩作品とともに紹介します。

会期：開催中～11月26日（日）

「徳丸晋 写真展『水面』－minamo－」

倶知安町在住の写真家・徳丸晋さんの写真作品「minamo」シリーズを紹介します。フィールドとする半月湖は倶知安町の豊かな自然を象徴する場所とも言えます。独自の視点で水面の色彩の変化を捉えた徳丸晋さんの作品世界との出会いをお楽しみください。

会期：12月2日（土）～平成30年2月4日（日）

アート・イベントのお知らせ

■アート・トーク　「小川原脩この一点」

当館が所蔵する小川原脩コレクションは約700点。その中から展示されている一点を選び、学芸員が作品にまつわるお話をします。

①小川原脩この一点『フゴッペ変奏曲 1959年』

40歳代、考古学にインスピレーションを得た意欲作。

日時：11月4日（土）14時～14時30分

お話し：柴　勤（当館館長）　会場：当館第1展示室（要観覧料）

②小川原脩この一点『無題（ナルシスのリメイク）1940年』

戦時中に未発表となり塗りつぶされた悲運の作品。

日時：11月11日（土）14時～14時30分

お話し：沼田絵美（当館学芸員）　会場：当館第1展示室（要観覧料）

■土曜サロン　アート探訪〈みて☆きいて〉8

「ルネサンスの巨匠」

イタリア・ルネサンスの三大巨匠と呼ばれるダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロ。この同じ時代に生きた天才たちが抱いたお互いの尊敬、ライバル意識、そして苦悩を見ていきます。

日時：11月18日（土）14時～15時

お話し：柴　勤（当館館長）　会場：当館映像ルーム　聴講無料

■アート・シネマ館

「華麗なる激情」1965年／138分／アメリカ・イタリア（字幕）

彫刻家ミケランジェロの天才的な画才を見出し、「システィナ礼拝堂天井画」の制作を依頼した教皇ユリウス2世。二人の葛藤と対立、そして熱い友情を描く歴史ドラマの超大作。

日時：11月25日（土）13時～15時30分

お話し：柴　勤（当館館長）　会場：当館映像ルーム　聴講無料